

研究ノート

戦後スペインと日本における学生運動のイメージ 及びその比較（1970年代迄）

—— 服装から見るイメージの分析 ——

ロペスハラ・サンティアゴ

López Jara SANTIAGO

I 「学生運動のイメージ」

1.1 失敗

この研究ノートの出発点は博士研究の私の失敗にある。修士論文で日本の大学紛争時代における「内ゲバ」と呼ばれる内部紛争の問題を取り上げ、博士進学時に課題を掲げて、戦後学生運動を研究しようとした。スペインでも同時代に学生運動が起こっていたことから、比較するに値する論題であると考え、スペイン・日本比較研究をしようとしたが、かなり無謀であったことがわかった。博士課程の最初の2年間、テーマを変えずに奮闘したが、研究をすればするほど、どの資料を優先すればいいのか、誰の声を聞けばいいのか、どの視点から分析すればいいのか、情報とテーマが錯綜して論文としてまとめることが難しくなっていた。戦後学生運動というテーマは奥が深く、そこに含まれる研究課題になり得る要素も非常に多岐にわたる。迷路の真ん中で迷子になってしまったかのような絶望感に陥った。そこで今回そのような中から抽出したのがイメージの問題である。色んな写真と動画を見て、日本の学生運動はスペイン学生運動のイメージとは多くの点において異なると分かり、その違いは重要な意味を持つと分かった。どうして人々の抱くイメージにこれほど差異が生じるのか、またそこにはどんな意味が存在するのかという論点をこの研究ノートの出発点とする。

1.2 イメージとは

イメージは資料として扱い難い。何故かと言うと、

イメージが伝えようとしていることは簡単に言葉で表現できないからである。歴史学に関連してイメージを分析する学問は図像学、イコノロジーと風俗学である。図像学は芸術作品に見られる象徴・寓意・隠喩などの意味を探る。イコノロジーは芸術作品を媒介として伝わるイデオロギーや時代精神などを分析する。この2つの学問にとってイメージとは芸術作品の類語である。しかし、この研究ノートで扱うのは芸術作品ではないので図像学とイコノロジーを利用できない。これに対し、風俗学は一つの解釈の方法として服装、言葉、行動様式、思想様式などを分析し、あらゆる集団のアイデンティティを研究する（山本明『戦後風俗史』1986年、頁153による）。この風俗学の解釈においてイメージとは主に服装を意味する。この研究ノートにおけるイメージの定義は風俗学に則する。扱う集団は「大学当局」（非常勤講師を含む）、学生と活動家である。「服」イメージは学生、活動家や「当局」が着る服とアクセサリ（ヘルメット、ゲバ棒、ヒゲなど）を指す。「場面」イメージは、学生、活動家や「当局」が同じ場所であっても日常生活と紛争の場面でそれぞれ異なる服装で異なる役割を演じた結果生じる場所に対する大衆が抱く印象を指す。

1.3 資料

扱ったスペインの資料はマドリッド自治州にある Archivo General de la Administración という政府中央資料館で閲覧した。扱った箱は F01254, F01255, F01257, F01425, F01152, F01757, F01760, F01259, F01258, F01743, F01460, F01755, F01424, F01685,

F01691, F01697, F01248 と F01696 である。箱ごとに数十の封筒が入っており、封筒ごとに数十枚写真がある。日本側の資料は神奈川大学資料編纂室と京都大学大学文書館で閲覧した。扱ったのは神奈川大学と京都大学が所有する写真コレクションである。両方の写真コレクションは数千枚に亘る。この研究ノートで紹介する日本側の写真は京都大学大学文書館写真コレクションに属する。扱った写真集は参考文献のところで述べる。ここに掲載する写真は調査の結果を紹介するための物である。注意を払って欲しい点が最も鮮明に見える写真を選んだ。

II 戦後スペインにおける学生運動——概略——

日本には戦後日本における学生運動を論題とする書物が数多くあるが、戦後スペインの学生運動を論じた著書は殆どない。この研究ノートを理解する上で最低限必要な、戦後スペインの内戦終戦からフランコ体制の歩みを簡潔に語りたい。スペイン戦後学生運動に関して基本となる出典は Helena Hernández Sandoica, Marc Baldó Lacomba と Miguel Ángel Carnicer の *Estudiantes contra Franco (1939-1975)* (2007 年), Miguel Ángel Ruiz Carnicer の *El Sindicato Español Universitario (SEU) 1939-1965* (1996 年), Juan José Carreras Áres と Miguel Ángel Ruiz Carnicer (編) *La universidad española bajo el régimen de Franco 1939-1975* (1991 年) と Roberto Mesa (編) *Jaraneiros y alborotadores* (1982 年) である。これから語る戦後スペインの歩みは主にこの出典に基づいた。

2.1 身分制度的社会——1939～1951——

【内戦勝利者フランコ側による過激な粛清】

1936 年 7 月 17 日より始まったスペイン最後の内戦は 1939 年 4 月 1 日に幕を閉じた。この内戦は特に凄惨を極め、クーデターを起こしたフランコ側とフランコによって瓦解した政府側あわせて 20 万人以上の人間が政治犯罪者として殺害されたが、フランコは更に、終戦直後に収容所に入れられていた死刑宣告を受けた囚人のうち約 4 万人を射殺し、それ以外の者には一時的職業資格無効、終身職業資格無効、資産接収、

流刑などの刑を科した。彼の保守的なカトリック贖罪思想に基づいた粛清の対象範囲は非常に広く、また執拗であった。内戦中に政治犯罪者として抹殺され、野原や山などに埋められた遺体を墓地に埋葬しなすことを禁じるなど、左翼政治犯罪者に対するフランコ体制の憎悪はとどまるところを知らなかった。遺体がある場所に近づくことや、公的に悼むことすら許さなかったことは Ignacio Fernandez de Mata の研究で明らかにされている。

制度でいえば、1940 年 5 月に制定された労働手帳制度が一例としてあげられる。勝者すなわち右翼の保守的勢力団体同盟側は、おとなしく制度に従わない者には労働手帳を渡さなかった。この手帳を持たないものは仕事に就くことができないので、一家揃って乞食になるか、餓死するしかなかった。

このように、勝者側であったフランコをリーダーとする右翼保守的勢力団体同盟は自らの支持者（主に地主や伝統的な上流階級の人間）に特権を与え、敗者側の元政府を支持していた者達（主に小作、自小作、日雇い労働者、労働階級や下層階級の人間）を徹底して抑えつけた。この過激な粛清により、スペイン社会は極端な勝者と敗者に分極化した身分制度的社会を形作ることとなる。

【徹底して粛清された教育界とスペイン現代化の停滞】

教育界の粛清は特に徹底されたものであった。

内戦前後のスペイン教育制度は古く、すでに施設や教師が非常に不足した状況であったが、フランコ政権はさらに、教師の 40% 以上の教師資格を剥奪して追放した。また教育制度民営化政策を執り、国立学校を閉校していった。この政策により、学費の安い国立学校はどんどん数を減らし、民間経営の私立学校が増えることとなり、下層階級の家庭の子供が学費を払って進学することはほぼ不可能となった。彼らがこのほか教育界を敵視した理由は、第二共和政時代（1931 年 4 月 14 日～1939 年 4 月 1 日）より教育改革が進むにつれ、上流階級の持つ特権に対し、下層階級より疑問や不満が噴出しはじめており、スペイン社会現代化への声が高まり、これに危機感を抱いていた背景がある。

フランコ政権を支持していたのは主にそういった特権を享受していた地主など伝統的な富裕層であり、彼らは自分達の立場を守ることに固執していたので、スペインの現代化をのぞまなかった。そのような富裕層の態度は教育界に特に顕著であったと Antonio Canales Serrano が指摘している。こういった動きは1920年代から始まっていた進学増加傾向に歯止めをかけ、スペインの現代化の動きを後退させることとなる。

【教育界の主導権争い、学生の政治離れ】

このようにしてフランコ政権下で進められた教育界の粛清だが、これを進めた勝利者同盟内のファランヘ党（第二共和政時代に誕生、ファシスト的思想を持つ）とスペインカトリック宣伝者協力会 ACNdP（Asociación Católica Nacional de Propagandistas）の間で主導権争いが起こる。ファランヘ党は大学生による組織 SEU（Sindicato Español Universitario、全スペイン大学組合）を持っており、これが当時学生のリーダーシップを取っていた FUE（Federación Universitaria Escolar：大学教育連盟、左翼思想を抱いた進歩的な組織）と対立した結果、学生の主導権を奪取し、ファシスト的思想に基づいた大学のあり方を目指した。一方の ACNdP は、学生ではなく教師達の間で勢力を広げ、カトリック思想に基づく保守的な大学のあり方を目指した。

1943年7月29日、両者間で ACNdP が主導権の大部分を握る形で協定が結ばれ、カトリック思想に基づく保守的な大学を実現すべく大学改変法（Ley de Ordenación Universitaria）が制定される。この中で、ファランヘ党員によって行われた政治教育と体操は必修科目となり、SEU への加入は学生の義務であることが決められたのだが、実際は主導権争いの渦中にあったため、この法律が制定されるまでは非常に時間がかかってしまい、その間に学生はすでに政治に無関心な者が多くなっていた。政治運動に参加するよりも卒業して働きたがるようになっており、学生は両科目に関心を払わず、前衛的意識を持っていた SEU は徐々に官僚的組織に変貌していった。また、SEU の掲げたレトリックと実体との間には大きなギャップがあった。「フランコのスペインでは階級や出身は関係なく優秀

な若者は大学にも進学できる」というのがファランヘ党のレトリックだったが、現実とはかけはなれたものであった。身近な例をあげれば、下層階級出身である私の両親は1950年代に義務教育（小学校まで）を受ける年頃だったが、家庭が貧しかった父は小学校に2年間しか行けず、8歳から農場で働くことになった。母は小学校で最も優秀な学生であり、最も良い成績を取ったが、経済状況の問題のせいで中高に進学できなかった。こういったことは、学生に体制に対する反感を持たせ、ファシスト的思想を普及させることに失敗した大きな要因であったといえる。

2.2 フランコ体制内部から生まれたスペイン現代化運動とその失敗——1951～1956——

【ファシスト派の影響の衰えと学生の意識の変化】

1943年、ムッソリーニが失脚するまで依然として非常に強い影響力を持っていたファシスト派だが、1944年以降影響力が徐々に衰え、国際連合からの批判が表面化し、スペイン共産党と無政府主義者同盟によるゲリラ戦の問題が悪化した。1946年に FUE と FNEC（カタルーニャ国家的学生連盟、Federació Nacional D'estudiants de Catalunya）が再建され、大学にもフランコ体制反対組織が現れ、内部からもフランコを批判する派が現れた。

そして1951年、バルセロナの地下鉄職員がストライキに入り、学生はこれを応援することによってフランコ政権反対姿勢を表した。1920年代プリモ・デ・リベラ独裁政権の反対運動が誕生して以来のことであり、政治的目的をもって行動する学生の再来であった。これ以前にも学生の騒動はあるにはあったが、19世紀からスペインの大学に散見する、勉強しなかったから試験を受けたくないとか、遊びたいとか、大学を休みたいなどといった理由からストを起こすような、昔ながらのスペイン独特の騒動文化とも言えるもので政治的な目的を持ったものではなかった。

学生の政治に対する無関心に変化が訪れた原因は高等教育の質の低さと SEU の失敗にあった。1951年の大学は学力レベルも低く、教育に消極的であったり、授業を欠勤する教授がかなりおり、整備不足のキャンパスには戦災の足跡がまだ残っているような状況であ

った。また依然とした上流階級の自己保身のみを目的とした保守的な政治により、国の経済も停滞していた。結果として、上流階級エリートの子供であり、高等教育を享受する特権を持つ側であった学生であっても卒業後就職できず、窮地に立たされることとなり、政治に無関心ではいられなくなったことがあげられる。

【フランコ体制内部からのスペイン現代化の試みと失敗】

体制内部からファシスト主義を支持しつつ現代化の改革を試みたのは、1951年7月18日、文部大臣に任命されたホアキン・ルイス・ヒメネス・コルテス（Joaquín Ruiz-Gimenez Cortés）である。彼の属するスペイン現代化推進派は勝利者同盟内から生まれた。カトリック寄りでありながらもリベラル思想をもつ彼は、高等教育制度を始めとするフランコ政権を改革し、スペインを現代化させようと数々の政策をうちだした。それらは後に実現することなく終わることになるが、後述する1950年代後半から勝利者同盟のリーダーシップを取るようになるテクノクラート派が生まれる布石となった。

ホアキンは彼と同じようにファシスト主義者かつスペインの現代化を望んだペドロ・ライン・エントラルゴ（Pedro Laín Entralgo：当事有名だったファランヘ党の思想家の一人）をマドリッド大学学長に、カトリック的ファシスト主義者アントニオ・トバル（Antonio Tovar：第二次世界大戦時宣伝省の次官・大学の改良を求めた）をサラマンカ大学学長に任命し、政治犯罪者として職業資格無効刑の罰を受けた優秀な元教授数人の教授資格を取り戻した。結果として1950年代の大学のレベルを向上させることに成功した。（この時期の大学のレベルは40年代だけではなく、60年代、70年代より高かった。）この教育改革により知的レベルが向上し、国際社会の実体により自覚的になった学生達は徐々に政治に対する関心を高め、弱体化していたSEUも再度学生を動員できた。SEUはこの波に乗り、同年、勝利者・敗北者と関係なく学生が求めた品質の良い演劇や映画などを集めた演劇クラブ（Teatro Español Universitario）と映画クラブ（Cineclub）を作り、休暇期労働サービス（Servicio Uni-

versitario del Trabajo）を立ち上げた。休暇期労働サービスとは学生を地方や田舎などに派遣し、労働者や農民者と一緒に暮らして働くプログラムである。しかし、皮肉にも学生はそこでフランコ体制のレトリックが示すスペインと、自分の目で見た現実のスペインとの間のズレを実感することになる。結果として、このサービスを体験したことによってフランコ体制反対者となる学生は少なかった。

ホアキンら政権内部の体制改革派はフランコ支持者であり、フランコ政権の正義を信じていた。彼らが求めたのはあくまで体制を維持した上での改善だったにもかかわらず、フランコと勝利者同盟はこれを許さなかった。勝利者同盟は改革派を激しく非難し、ホアキンの影響力は弱まり、内部からの改革の動きは下火になっていった。しかし、この一連の出来事で再び政治に関心を持ち始めた学生らの体制に対する疑念はそうはならなかった。

【学生によるフランコ体制反対運動の再開】

① 英国大使館事件

この事件をきっかけとして大学でフランコ体制反対運動が再開されることとなる。

1954年1月27日、SEUによる学生抗議デモが起こった。英国と長年領土争いを繰り返していたジブラルタルに、英国女王エリザベス二世が訪問したことに抗議するためである。実はこのデモの裏で糸を引いていたのはフランコであったのだが、学生の勢いは思いのほか激しく、集会は予想外に大規模となり、警察を動員し実力で阻止せざるを得なくなった。銃で制圧する警察に対し、学生は近くにあった建設現場のレンガを警察に投石して抵抗した。鎮圧後、学生は内務省の前で「人殺し！」と叫びながら抗議集会を開き、学生を抑圧した警察の解任を求めた。1月28日には警察の抑圧とそれを許したフランコ体制を批判するデモを行った。これはフランコが手引きした前日のデモよりも大規模であった。「27日のデモにはスペイン人かつファランヘ主義者として参加したが、今日28日のデモにはスペイン人としてのみ参加した」とはデモに参加した学生達の言である。

② スペイン若手作家大会

1956年1月末に開催予定だったこの大会が体制側に禁止されたことにより、学生の反感が強まり、フランコ体制批判に拍車をかけることとなる。

この大会は1954年6月より共産党系学生により、体制側に睨まれぬ様、SEU機関紙を利用して、レトリックを巧妙に織り交ぜながら告知され、準備が進められていたものであったが、1955年10月18日、スペインの現代化を求めたリベラル派の象徴ホセ・オルテガ・イ・ガセット（著名な哲学者・評論家）が亡くなったことで大会開催への熱気が一気に加速する。それは彼の追悼式には、彼を支持する学生の他、スペイン全土でトップであるマドリッド大学の大学法学部長までもが参加していたのだが、追悼式はそのままデモに変わり、リベラル思想を応援する姿勢が公的に表明された場となったことに端を発する。

この追悼事件後、フランコ体制に反感を持った学生達によって1955年にスペイン誌集会、1956年にスペイン若手作家大会開催の計画が具体化された。同年12月マドリッド大学で開催されたスペイン誌集会では、政治犯罪者であるとして読むことが厳禁された詩人の詩が公的に朗読された。次に開催予定であったスペイン若手作家大会も、マドリッド大学学長の準備会への資金寄付、学長室の近くの部屋を貸すなどの熱心な援助によって着々と準備が進められていた。

しかしこの活発な動きを危惧した体制側はSEUを介してこの大会を禁じた。

これに対する学生の反応はフランコ体制にとって驚くべきものだった。憤慨した学生は当事ほとんどSEUから選出されていた学生代表を、SEUのメンバー以外から新しく選出しようと、2月7日法律学部で選挙を開催した。候補者にはSEUメンバー、君主制擁護者と無所属の立場の者がいたが、無所属の者しか選出されなかった。SEUはこの選挙を妨害しようと、保守的ファランヘ主義の暴力団グループを動かし、このSEUの対応を批判すべく、マドリッド法学部長により再び集会が開かれようとしたが、暴力団約30人は集会所を占拠し、法学部長に暴力を働こうとしたので、これを阻止しようとする学生との間で衝突が激化していった。次の日、授業はすべてキャンセルされ、学生はベンチや机を壊した破片で武装して、キ

ャンパスを徘徊していた青いシャツ（ファランヘ党の制服）を着た学生証を持ってない者をキャンパスから追い払った。その後、文部省までデモをし、文部省前で数時間の抗議デモを開いた。

翌々日2月9日は奇しくもファランヘ党にとって大事な記念日で、1934年2月9日に20歳で社会党青年2人に殺害されたマティアス・モンテロ（Matias Montero）というファランヘ党員を悼み、彼の死んだ場所でファランヘ党員とSEU組員によって記念集会を開く習慣があったのだが、英国大使館前事件以降フランコ体制に反感を持っていた学生はその場に集結し、ファランヘ党とSEU反対のシュプレヒコールを叫んだ。批判の声を聞いたファランヘ党員は銃で学生を撃った。当時スペインではファランヘ党員は銃を携帯していて、フランコ体制に反対するものであれば射殺しても問題なかった。その後、フランコ側は武力を行使し2日間で学生を制圧した。2月10日、この事態をうけてフランコはマドリッド大学を閉校し、全国に戒厳令を敷き、法学部長、先の改革派ホアキン文部大臣とファランヘ党大臣を解任した。マドリッド大学学長は辞任した。この事件によって、体制内部からうまれたスペイン現代化推進の動きによって回復しつつあった大学の教育レベルはまた落ち込み、高等教育の現代化は後退することになる。

2.3 フランコ政権に対する様々な反対運動

——1956~1978——

【テクノクラート派の台頭】

上記1956年2月の事件の結果として消えていった改革派に変わり、テクノクラート派と呼ばれたカトリック的技術者グループの台頭が始まる。辞任させられたホアキン文部大臣らが教育を改革の重点に置いたのに対し、テクノクラート派は経済制度のみの現代化に専念した。日本には「和魂洋才」の思想があるが、そのスペイン版「西魂洋才」ともいえる、スペイン固有の精神と伝統を変えずにリベラル的資本主義的経済政策を実施しようとする試みである。つまり、勝利者が作った身分制度的社会の基盤を維持したまま市場経済の利益を得ようとしたのである。この派のモデルはビスマルクのプロイセンと明治の日本であった。

【共産党の方針転換】

1956年にはまた、スペイン共産党がスターリン死後、それまで行ってきたゲリラ政策を改め、新しい書記長サンティアゴ・カリージョ（Santiago Carrillo）によってこの年（ちょうど内戦勃発20周年であった）に提案された和解政策に方針転換した。内戦で負けたことを受け止め、憎悪を乗り越え、スペイン人を統合するのが基本的理念である。フランコ体制に武力で抵抗するのではなく、体制内部に潜入し、内部から徐々に民主的なスペインを目指すことを目的とした。フランコ体制下においても選挙と労働組合は存在していたのだが、非民主的な選挙制度といい、かろうじて唯一認められていたファランヘ党の労働組合といい、勝利者同盟側の支配下におかれたものであった。とはいえ、労働者は労働組合代表を自由に選べる権利があった。これを糸口として、組織内部に入り込み、徐々に自由の範囲を拡大するというのが体制反対勢力の戦略であった。

【フランコ体制反対組織の再建】

1950年代後半、大学では1956年に青年社会党（Juventudes Socialistas）や1958年に人民解放戦線（Frente de Liberación Popular, 以下FLP）などさまざまな体制反対グループが現れ、SEUの影響力は急速に衰えた。これにより、公的にフランコ体制を批判すること、自由に自分の意見を表現すること、デモクラシーを求めること、スペイン語ではない自分の母語で政治運動をやること、表現の自由を求めることや政党の設立を求めることなど、およそフランコ体制下では考えられないようなことが大学内では日常的に行われた。いわば大学という名の解放区であった。フランコ体制側は特高や警察を毎日キャンパスに駐在させるなど取り締まりを強化し、体制反対運動リーダーたちの逮捕は珍しくない出来事となった。勢いを増す反対運動に対し、フランコ体制は1963年末に治安裁判所（Tribunal de Orden Público）を設立した。これは政治犯罪を裁く機関として、非常に厳しいものであったが、もはや体制反対運動は大学の文化ともいえる程学生達に浸透していたので、勢いが衰えることはなかった。

【共産党の内部対立】

1964年にはスペイン共産党が分裂した。主流派となったサンティアゴ書記長派と、彼らの完全武装放棄の政策に反対した分派・毛沢東主義者Pce (m-l)（Partido Comunista de España Marxista-Leninista, マルクス主義・レーニン主義的スペイン共産党）党である。この党は1971年から武装闘争の姿勢をうちだし、1973年にはFRAP（Frente Revolucionario Antifascista y Patriota, 愛国的反ファシスト革命的戦線）というテロ団体となった。

【SEUの解散とAPEの失敗】

1965年、ついに解散原因となる事件が起こる。2月21日体制反対派の学生がマドリード大学で開かれた集会で、禁止されていたルイス・ブニュエル（Luis Buñuel：体制や上流階級を批判した映画を作った）の『ビリディアナ』という映画を映写しようとしたが、SEUによって阻止された。学生達はこれに反抗しデモ行進をしたが、キャンパスに駐在していた警察により攻撃された。22日には学生はSEUの廃止を要求する抗議集会を法律学部館で開いたが、これも警察に妨害された。その後、学生達は今度は同大学哲学学部長の支持を得て、法律学部館の前にある哲学部館で再び抗議集会を開き、デモ行進をした。結局警察によって鎮圧され、フランコは学生を手伝った教授や学部長を大学から追放した。しかし結果としてSEUは学生の支持を完全に失い、4月5日に解散に追い込まれた。

SEUの後釜にフランコ体制側は学生協力会（Asociación Profesional de Estudiantes, 以下APE）を提案し、SEUより民主的な学生組織を作ろうとした。しかし、フランコの息のかかった組織に参加したいと思う学生はもはやいなかった。

【体制反対学生運動のリーダーシップをとった全国学生民主的組合の誕生】

1966年3月9日、バルセロナ学生民主的組合（Sindicato Democrático de Estudiantes de Barcelona, 以下SDEB）が大学から離れたカプチン会の修道院内で生まれた。SEUの解散以来警察からの弾圧が激しく

なったのでキャンパスの利用が難しかったためである。このAPEと対立する新しい組織が生まれたことにより、バルセロナ大学は学生運動のリーダー的存在となった。しかし、この組織は労働闘争において、労働者でない学生たちが参加することについての内部対立が起こったのと、警察からの激しい弾圧が原因で同年12月には分裂してしまう。

1966年末にはAPE第一回大会と、SDE (Sindicato Democrático de Estudiantes, 全国学生民主的組合) 第一回大会が開かれた。フランコ体制が作ったAPEの大会にはどの大学からも学生代表の参加はなかったのに対し、ヴァレンシア大学で開催されたSDE第一回大会には数々の大学からの学生代表が派遣された。今回の学生達の行動は、大学から離れたところでひっそり活動したSDEBとは対照的に堂々としたものだった。同じく大会のキャンパス利用は学長に拒否されたのだが、めげずに大学当局に訴え続けた。こうしたあけっぴろげな態度に大学当局、警察や特高などはかえってとまどってしまった。体制反対運動が公的に活動されるだけでなく、代表者を逮捕しても、警察や特高が参入しても、体制側のスパイ潜入がばれても大会は続いた。機動隊が現れても学生は抵抗する動きを見せず、大会は続いたのであった。

フランコ体制が生まれてこのかた、警察が検挙された体制反対者を拷問したり、暴力をふるうことは日常茶飯事だったのだが、これまでは学生に対してはそういった行為を控えていた。しかし、このSDE第一回大会事件をきっかけとして学生の特別扱いはなくなった。例えば、1969年1月20日に死んだEnrique Ruanoという学生の事件が例に挙げられる。彼は特高に逮捕され、警察署の7階の窓から転落して死んだ。警察側は「自殺」したと述べたが、殺されたことは一目瞭然であった。学生はこの事件に対しデモなど抗議活動をおこし、24日にはフランコは再び戒厳令を敷き、マドリード大学は閉校に追い込まれた。

【大学制度改革と運動の衰退】

1956年以降中止となっていた高等教育制度の合理化は1968年から再び実施された。この年から学生運動は、合理化政策の1つであった新しいセンター試験

と非常勤講師の待遇問題に集中した。1970年からまだ非合法であった政党は学生運動に入り、政党はフランコ体制が出来なかったことを成しとげることができた。政党によって主導権争いは学生運動を分裂した。1973年から学生運動の影響力が衰えた。とはいえ、1978年まで学生によって体制反対の活動は頻繁に起こり、大学の閉校や学生の逮捕などは日常的な出来事であった。

Ⅲ 学生イメージの研究史

戦後日本における学生運動をテーマとする本が数多くあり、スペインの学生運動を論じた著書も多い。イメージに関して何が語られてきたかをここで述べたい。

3.1 日本

学生運動は特に日本共産党第六次全国協議会（1955年7月、六全協）から議論される。六全協は戦後学生運動に最も強い影響を与えた出来事である。六全協誕生と新左翼誕生との間に書かれた『日本の学生運動——その理論と歴史——』（1956年）ではコミンフォルム批判以降の運動の混乱状況が述べられるが、イメージに関しては論述されない。『戦後学生運動史』（1957年）では山村工作隊の悲劇、日共の方針変化のショックや砂川闘争に参加することの意味などが論じられるが、イメージの問題が述べられない。新左翼が誕生した後の『全学連の実態——その派閥を中心として——』（1959年）では新左翼を非難する立場から新左翼の誕生や思想が語られるが、学生のイメージはどこにも現れない。

60年安保闘争と大学紛争との間に書かれた『現代の学生運動・その思想と行動』（1966年）では党派にとっての大学自治会の重要性や革命思想などが語られるが、イメージに注意を払っていない。

大学紛争中に現れた『全学連各派』（1969年）は学生運動の辞書であり、全学連各大会の経過が述べられている。この本では活動家学生のヘルメット色分けと全学連関係組織の図があるが、説明がなく、イメージの論述はない。

1970年の『写真図説——日本学生の歴史』は写真で幕末から大学紛争まで学生イメージの変化を見せるが、イメージの意味、変化の意味などは論じていない。ただし興味深い点がある。1967年10月羽田闘争で公的に現れた活動家のイメージが1965年の日韓条約批准反対闘争から飛躍的に武装を強化した機動隊に対抗するものであることは事実であったに違いないと述べた。学生のその強い姿勢は1952年前後の火炎瓶闘争の時に見られなかったことも指摘した。1971年朝日の『大学シリーズ』では写真で日本大学、慶応大学、法政大学、明治大学、中央大学や早稲田大学の歴史を語るが、同じく学生イメージの変化の意味などは論述されない。

1980年代に入ると学生運動の記憶にはロマン化の色彩がでてくる。高沢皓司の『全共闘グラフィティ』（1984年）はノスタルジー、全共闘に対する憧れの視点から書かれた本である。活動家のイメージをよく見せる本だが、イメージそのものの分析はない。それに対して船曳武雄の「東大闘争は何であったのか」（『東京大学 東京大学公開講座』1998年）はイメージの問題を取り上げている。まだエリートであった学生は国民から期待され、戦時に戦士として、平和時に教養あるエリートとしての役割が担わされたと指摘した。船曳氏は闘争で斃れた学生の公的葬式の例を挙げて、1967年代末まで学生は「国民の戦士」として見られたことを証明し、見られるイメージとして学生を分析した。桂秀美は『1968年』（2006年）で大学紛争の無意識歴史を論じるが、ここでイメージの問題に触れた。学生服を着て政治活動をやすることは学生の伝統であったが、その伝統は全共闘で消滅したと指摘した。

茜三郎・柴田弘美の『全共闘』（2003年）と渡辺ひろみの『東大全共闘1968—1969』（2007年）は写真集として闘争中活動家のイメージを掲載するが、イメージの分析はない。小熊英二は『1968』（2009年）で党派の思想と学生の感情を取り上げて学生紛争時代の説明を試みたが、学生のイメージについての論述はない。但し活動家のイメージは日韓条約反対闘争以前に党派との間のゲバルトで生まれたと述べた。三橋俊明は『路上の全共闘1968』（2010年）でノンセクトラジカルであった自身の日大闘争バリケードの経験を語

る。この本にはイメージの分析はないが、二つの点を指摘したい。1960年代末に大学で学生服を着るのは右翼系学生のみであったことがこの本によって理解できた。また、三橋氏はデモの雰囲気に関して次のようにコメントしている。曰く、「デモ隊が“ワッショイ”と言うと、別の誰かが“ワッショイ”と答えた。そんなやりとりの感覚は、私の経験で言うなら、幼い頃から訓練した神田祭の御輿の間合いとリズムにほぼ重なっていた」。

ここまで日本学生のイメージに関して何が語られてきたかを紹介した。

3.2 スペイン

フランコ体制は1970年代末に終わるが、スペイン民主制度は1981年2月23日のクーデターが失敗した後から始まったといえる。フランコ体制下学生運動の研究は1990年代から始まっており、この中でイメージに関して何が述べてきたかをこれから紹介する。

この分野でMiguel Ángel Ruiz Carnicerは最も多く引用されてる研究者である。彼は『La universidad española bajo el régimen de Franco (1939-1975)』（1991年）と『Estudiantes contra Franco』（2007年）でフランコ体制下の学生運動と大学の歩みを語るが、学生イメージの問題は論じていない。José Álvarez Covelasは「La FUDE 1961-65」（1995年）で一時的に学生運動の覇権を握ったFUDEの誕生と衰退を論ずる。FUDEは平和的学生組織として生まれたが、1965年から組織内対立が激しくなり、混乱状態に陥り、1970年代にテロ団体を生み出した。この論文では視覚資料が使用されず、イメージは論題とされてない。

Sergio I. Rodríguez Tejadaは「La caída de la organización universitaria del PCE en Valencia en manos de la policía franquista (1971)」（1995年）で警察と特高のアーカイブスを利用して、フランコ体制側のスパイの視点から学生のイメージを論ずる。学生はエリートとして見られており、1960年代末までは逮捕されても拷問などはされなかったが、以降は体制反対分子として警察や特高からの特別扱いはなくなったと証明している。Pascual Tamburriは「El imaginario

medieval en la universidad franquista」(2001年)でフランコ体制が持った大学のイメージを述べるが、学生のイメージには触れていない。

2005年の「Estudiantes, cultura y violencia política en las universidades españolas. 1925-1975」で Javier Muñoz Soro, Jose Luis Ledesma と Javier Rodrigo は政治的暴力の視点から学生運動を語るが、学生のイメージには触れていない。同年の「El discurso de la violencia en la izquierda durante el último franquismo y la transición (1968-1972)」で Javier Muñoz Soro, Jose Luis Ledesma, Javier Rodrigo と Shopie Baby は1970年代学生運動における暴力とテロの問題を論じ、独裁制度から民主制度までの変化が比較的円滑にできた理由は左翼が治安を威嚇する姿勢を取らなかったからと述べた。Andrea Fernandez-Montesinos Gurruchaga は「Los primeros pasos del movimiento estudiantil」(2009年)で1951年から1956年までの運動の歴史を語り、学生が望んだ大学のイメージを明らかにしているが、学生自身のイメージには触れていない。

ここまでスペイン学生のイメージに関して何が語られてきたかを紹介した。

IV イメージの分析

4.1 「服」のイメージ —— スペイン ——

① 「大学当局」

「2. イメージとは」で述べたが、この論文においての「大学当局」とは文部大臣、学長や学部長だけではなく、教授や非常勤講師なども含む概念であると改めて強調したい。「大学当局」の「服」イメージは3つの時期に分けることができる。最初の時期は1940年代末までである。次の写真(IV Consejo Nacional del SEU: 参照番号 F-1697-16-0003-a, 1940年1月)を参照されたい。

この写真は1940年1月に開催したSEU大会での「大学当局」を撮影したものである。よく見ると、「当局」の「服」イメージは1つだけではないとすぐ分かる。このイメージの多様性にはどんな意味があるのだろうか。内戦に勝ったのは保守的勢力団体同盟であ



り、派閥によってそのイメージは異なった。ファシスト服はファランヘ党派、軍服は軍隊派、宗教団体服はカトリック教会派、背広は伝統的上流階級派の「服」のイメージであった。1943年7月29日(大学制度改革法の公布)以来大学は主にカトリック派と伝統的上流階級派のものとなったが、「大学当局」の「服」イメージは4つのまま1940年代末まで存在する。つまり、イメージの多様性はヘゲモニー争いがまだ終わってなかったことを意味する。

2番目の時期は1960年代後半までである。次の写真(Asamblea Extraordinaria Servicio Español del Magisterio: 参照番号 F-1696-12-001-a, 1968年8月)を参照されたい。



この写真はフランコ体制が開催した高等教育大会での「大学当局」を撮影したものである。ここでは、背広と、背広と同等程度の女性が着るフォーマル服の姿しか見られない。なぜだろうか。フランコ体制は内戦勝利者同盟の集団であるが、フランコ個人の勢力基盤は軍隊とファランヘ党であった。フランコは戦後の国内外からの批判の声を乗り越えるためにファランヘ党

の姿をファシスト服から背広に変えた。更に1950年代に入るとファランヘ党の勢力が衰え、伝統的な上流階級の影響力が強くなったので、背広の姿は一般的となった。

3番目の時期は1960年代後半からである。次の写真（Los PNN reunidos con autoridades del Ministerio de Educación：参照番号F-1254-17-001-a, 1977年1月28日）を参照されたい。



この写真は文部省で開催した文部大臣と非常勤講師運動代表団との間の交渉シーンでの「大学当局」を写したものである。左側は当時の覇権を受け継いだテクノクラート派、右側のヒゲの姿は元フランコ体制反対学生運動リーダーだった教授と非常勤講師達の「服」イメージである。なぜ同じイメージではないのか。ヒゲの姿は元フランコ体制反対学生運動リーダーだった教授と非常勤講師となった者のイメージである。

② 学生

2つの時期に分けることができる。1960年代後半までにおける学生の「服」イメージの特徴を探るために、前述したIV Consejo Nacional del SEUという写真と、次の写真（La hora de los manteles：参照番号F-1258-29-002-a, 1951年3月6日）を参照されたい。

この写真は1951年3月6日に大学食堂で撮られたものである。この2つ写真をよく見ると、学生の「服」イメージは「当局」と同じであると分かる。この写真では、学生は当時の「当局」と同じく、背広を着ている。「当局」の「服」イメージと同じなのはなぜなのか。その理由は、スペインでは18世紀まで



は独特な「学生」のイメージがあったが、その伝統は19世紀には消えていた。高等教育は上流階級の特権となり、結果として「当局」と学生が属した階級は同じとなったことがあげられる。

2番目の時期は1960年代後半からである。次の写真（Comenzaron las clases en la Universidad Tarraconense：参照番号F1757-17-001-a, 1970年10月25日）を参照されたい。



この写真はカタルニア地方にあるタラゴナ市で新しく設置した大学での学生を撮影したものである。前述の背広姿の学生とは違い、カジュアルになっており、「大学当局」の「服」イメージからは明確に分離している。この時期から大学のマス化が始まり、徐々にアッパーミドル階級の人も大学に進学できるようになった。若者「服」のイメージはこの時期に誕生した。

③ 活動家

2つの時期に分けられる。最初の時期は1940年代末までである。次の写真（SEU-Franco：参照番号 F-1696-23-004-a, 1948年5月2日）を参照されたい。



この写真はSEU代表がフランコに謁見するシーンで、フランコ以外のSEUトップメンバーが写されている。活動家は独特な背広姿（ファランヘ党の制服の1つ）を見せる。なぜなら、ファランヘ党はフランコ体制下で政治活動が認められていた唯一の党であり、ファシスト的姿ではなければ政治活動をやることはありえなかったからである。1940年代末まで政治活動をやるときの学生はファシスト服を着ている。

2番目の時期は1950年代に入ってからである。次の写真（Educación Enseñanza Universitaria Estudiantes Asambleas：参照番号 F-1258-20-002-a, 1977年2月17日）を参照されたい。



この写真はマドリッド大学自治会でのスペインの全共闘運動を写すものである。この時期、学生である活動家は毎日キャンパスで見せる学生の「服」イメージで政治活動をした。ようするに、活動家には独特な「服」イメージが存在しないのである。

4.2 「服」のイメージ ——日本——

① 「大学当局」

日本の「大学当局」の「服」イメージは1つしかない。次の写真（園遊会：参照番号 330-00042, 1958年5月）を参照されたい。



「当局」の人間は背広を着ている。他の「服」イメージは見当たらない。どうしてだろうか。スペイン「当局」のイメージ変化についての説明で、そのイメージの視聴者が学生ではなかったことは前に述べた。それに対して日本で「当局」イメージの視聴者は学生であるといえるだろう。

② 学生

「Ⅱ 戦後スペインにおける学生運動」でスペイン学生の社会的位置などを簡潔的に述べたが、ここで、学生の「服」イメージに触れる前に日本における学生位置の変遷を概略的に述べたい。日本の大学制度は、江戸時代教育機関と無関係ではないとは言え、明治維新後に現れ、現代国家が生んだものである。学生は現代の道を歩み始めた国家を救うべき者であり、教養あるエリートと考えられた。スペインとは違って、学生であることは上流階級の特権ではなかった。戦後になっても、『きけわだつみの声』（1947年）や樺美智子の死（1960年6月15日）にインパクトを与えられつつも学生の社会的位置はしばらく変わらなかったが、大学のマス化が進むにつれ風化していき、全共闘運動が発生すると共にこの優良イメージは変化することとなる。

日本の学生の「服」イメージには2つの時期がある。初めは1960年代前半までである。次の写真（西部食堂パンショップ付近：参照番号 020-00005, 1959

年)を参照されたい。



すべての学生は学生服を着ている。「当局」の「服」イメージとは明確に差別化される。スペインの場合、高等教育は上流階級の特権であり、当時の「当局」と学生は異なる立場ではあったが同じ階級出身であり、それが彼らの「服」イメージに共通項を作っていた。しかし日本はそうではない。イメージの視点から分析すれば、日本では大学に進学することは上流階級だけの特権ではなかったと言えるだろう。ここにスペインと日本の違いを見ることができる。

2番目の時期は1960年代後半からである。次の写真(中央食堂:参照番号D-00603, 1970年頃)を参照されたい。



この写真をよく見ると、学生服の姿は殆ど消え、学生は若者の服を着ている。なぜならこの1960年代に、現代の若者文化が生まれたからである。

③ 活動家

活動家の「服」イメージは2つの時期に分けられる。まずは1967年10月羽田闘争までの時期の活動家の「服」イメージの特徴を写す、次の写真(破防法反対京大総決起大会:参照番号316-00025, 1961年6月6日)を参照されたい。



学生である活動家は政治運動に参加するときも服装を変えていない。当時の学生の「服」イメージのまま政治活動をしている。学生服の時期では学生服で、若者服の時期は若者服で運動に参加している。何故なのか。当時学生であることと、活動家であることとの間のズレはまだ大きくなかったからだと思われる。

2番目の時期は羽田闘争から始まる。次の写真(タイトル無し:参照番号372-00076, 1969年9月20日)を参照されたい。



この時期では、活動家の「服」イメージはヘルメットやゲバ棒などの姿である。1967年以降、活動家は後に「過激派」の姿となるこの「服」イメージで政治運動に参加している。これにはどんな意味があるの

か、「過激派」のイメージが現れてから学生であることと、活動家であることとの間のズレは大きくなった。学生であるか、活動家であるかどうか1つしか選ばざるを得なくなったといえる。

4.3 「場面」のイメージ ——スペイン——

この研究ノートで述べる日常生活という「場面」は、学園祭開催期間以外のキャンパスを指す。紛争という「場面」は紛争中のキャンパス内外を指す。これを考慮して写真を分析した。

① 日常生活という「場面」

2つの時期がある。1番目の時期は1960年代前半までである。写真（Facultad de Derecho：参照番号 F-1259-37-002-a, 1958年12月15日）を参照されたい。



この写真はマドリッド大学法律学部館内の学生を撮影したものである。当時「大学当局」と同じ「服」のイメージで日常生活をおくる学生の場面である。

2番目の時期は1960年代後半からである。写真（SEU-Agencia de viajes：参照番号 F-1697-01-002-a,



1967年）を参照されたい。

この写真はマドリッド大学学生課に訪れた学生を写したものである。若者の「服」イメージをまとった学生の日常生活の場面である。

② 紛争という「場面」

紛争という「場面」イメージには1つの時期しかない。写真（Manifestación de estudiantes por la Calle Fuencarral：参照番号 F-1254-06-001-a, 1977年12月14日）を参照されたい。



マドリッド中心でフランコ体制反対のデモをしている学生を写したものである。学生は当時の学生の「服」イメージで政治活動をしている。

4.4 「場面」のイメージ ——日本——

① 日常生活という「場面」

2つの時期がある。1番目の時期は1960年代前半までである。前に紹介した「西部食堂パシヨップ付近」を今一度参照されたい。学生服を着た学生達の日常生活の場面である。

2番目の時期は1960年代後半からである。前に紹介した「中央食堂」をもう一度参照されたい。若者の「服」イメージでの日常生活の場面である。

② 紛争という「場面」

2つの時期がある。最初は1967年10月羽田闘争までの時期である。次の写真（荒神橋をデモ行進する学生：参照番号 347-00069, 1953年頃）を参照されたい。

学生活動家は政治活動に参加する時も日常生活と同じく学生の「服」イメージで闘争に参加する。学生服の時期には学生服で、若者服の時期には若者の服で闘争に参加する。



2 番目の時期は 1967 年 10 月羽田闘争からである。

次の写真（タイトル無し：参照番号 306-00014, 1970 年頃）を参照されたい。



2 つのイメージがあるということが分かる。日常生活の姿で参加している学生（若者の「服」イメージ）と、ヘルメット・ゲバ棒の姿で参加している学生（活動家の「服」イメージ）である。どうしてだろうか。イメージに注意を払う視点から分析すれば、この時期で活動家の紛争と、学生の紛争は徐々に違ってくる。学生のイメージで参加する者にとって紛争は日常生活の一部であったが、活動家のイメージで参加する者にはそうでなかったといえる。

V 日本・スペイン比較の試み

5.1 「服」のイメージ

① 大学における「当局」のイメージ

スペインにおいては、「当局」の「服」のイメージは派閥に属する意味を持つ。すなわち、どの派閥に属するかによって異なる「服」イメージをまとった。日本ではそうではない。この違いを考慮すれば両国の学生運動の違いがより鮮明になってくる。Ⅱのところでは

1951 年から 1956 年までフランコ体制内からの改革とその失敗を述べた。これをイメージに注意を払いながらの視点から分析すると、新しいものが見える。改革派「当局」と学生は同じ「服」イメージをまとっていた。これにより、文部大臣やマドリード大学学長などは改革派学生を積極的に応援することにあまり違和感を感じなかったのではないか。対して日本では学生運動を積極的に応援した「当局」はそれほどなかったといえる。イメージの違いと無関係ではない。

② 学生

スペインでは、若者の「服」イメージが生まれるまで、学生は自分の出身階級による「服」イメージを持つ。つまり、「当局」と同じ「服」イメージである。日本の場合、学生は現代若者文化が誕生するまで学生服は「エリート・教養」の象徴であった。何故かというところ、スペインは少なくとも 1960 年代後半まで特権社会（上流階級の特権を何よりも大事にする社会）であったのに対し、日本は少なくとも戦後開始から実力主義的な社会であり、学生であることイコール教養を備えたエリートであることの証であったためといえるだろう。ところで、今日日本の国立大学大学生をイメージの視点から分析すれば、今の日本は当時よりもスペイン的特権社会に傾いているといえるかもしれない。

③ 活動家

スペインでは 1940 年代に、日本では 1967 年以降に、異なったイメージの活動家と学生の姿が見られる。そしてこの時期の活動家の活動は暴力をとまなう。対して、活動家と学生が同じイメージを持つ時期には暴力は殆ど発生しない。これは非常に興味深い現象であり、今後考察を深めたい。

5.2 「場面」のイメージ

① 日常生活

両国の「場面」のイメージ変化を見ると、1960 年代後半から学生は若者「服」のイメージを持つことが分かる。現代史の転換点として 1960 年代の重要性がはっきりと浮かび上がってくる。日本でも、スペイン

でも現代の若者は同じ時期に生まれている。これについても今後、研究すべき課題である。

以上

② 紛争

スペインの紛争の「場面」イメージをよく見ると、日常生活の「場面」イメージとはそれほど変わらない。日常生活のルールと紛争中のルールはそれほど違わないといえる。ようするに日常生活で考えられないことは紛争中でも考えられないということである。対して日本は、1967年10月羽田闘争まではスペインと同じく、それほど異ならなかった。しかし1967年10月羽田闘争から紛争の「場面」イメージに変化が起こる。紛争の「場面」イメージを活動家の「服」イメージで演じるためには、強い非日常的要素が必要とされた。結果として日常生活とはかけはなれた事態が発生することとなる。

VI むすび

この論文で「服」と「場面」のイメージを考慮してスペイン・日本比較研究を試みた。その前提としてフランコ体制下の学生運動の歩みを語った。これから研究すべき課題も提示した。このむすびのところで紛争の雰囲気に関して三橋氏のコメントをもう一回引用して、これからのイメージ研究がとるべき方向性を述べたい。曰く、「デモ隊が“ワッショイ”と言うと、別の誰かが“ワッショイ”と答えた。そんなやりとりの感覚は、私の経験で言うなら、幼い頃から訓練した神田祭の御輿の間合いとリズムにほぼ重なっていた」（『路上の全共闘 1968』）。文化というものは複雑であり、新しいものが生み出される時にも完全にゼロから作られるわけではない。既にある要素が流動的に交錯しつつ、形作られ、新しいものが生まれる。日本文化は「戦後紛争の文化」を作ったが、これに「祭」や「一揆」などの日本古来の文化が関係してないとはいえないだろう。むしろ他にもあるのではと疑問に思う。戦後学生運動をよりよく理解するために、党派の思想などは大切であるが、ここで述べたイメージがもたらした影響も研究し考察するに値する重要な要素であると考え。イメージはただ姿形だけではなく、必

ず意味をもつからである。

参考文献

石田剛

「学生運動の社会的分析」『教育社会学研究』1971

今西一

「早稲田大学・1950年——歴史の証言——吉田嘉清・竹内良能に聞く——」『立命館言語文化研究』2009

「占領下東大の学生運動と「わだつみ会」（Ⅰ）——岡田裕之氏に聞く——」『商学討究』2009

「占領下東大の学生運動と「わだつみ会」（Ⅱ）——岡田裕之氏に聞く——」『商学討究』2010

「占領下お茶の水女子大学の学生運動——杉内蘭子・岡百合子氏に聞く——」『商学討究』2010

岩乗弘

「今なぜ盛ん？ 50年代の学生運動の回顧と検証」『金曜日』2002

絳秀実

『1968年』2006

嘉悦康太

「戦後日本に於ける高等教育行政の政治的区分化の試み」『嘉悦大学研究論集』2009

学生運動研究会・新興出版社

『現代の学生運動・その思想と行動』1966

学生生活編集部

『戦後学生運動史』1957

川西秀哉

「敗戦後における学生運動と京大天皇事件——「自治」と「理性」というキーワードから」『京都大学代学文書間研究紀要』2007

小坂修平

『思想としての全共闘世代』2006

島泰三

『安田講堂 1968-1969』2005

社会問題研究改編

『全学連格派』1969

高沢皓司

『全共闘グラフィティ 増補』1984

東京教養学部歴史研究会のなかで、学生運動史研究会、編集者萩原久利

『日本の学生運動——その理論と歴史』1956

日刊労働通信社

『全学連の実態——その派閥を中心として』1959

長谷川高生

『独裁から民主主義へ——スペインと日本』1999

船曳健夫

「東大闘争」とは何であったのか」『東京大学 東京大

学公開講座』1998

三橋俊明

『路上の全共闘 1968』2010

山本明

『戦後風俗史』1986

Alberto Carrillo-linares

“Movimiento estudiantil antifranquista, cultura política y transición política a la democracia”, *Pasado y memoria. Revista de Historia Contemporánea*, 5, 149-170, 2006

Andrea Fernandez-Montesinos Gurruchaga

“Los primeros pasos del movimiento estudiantil”, *CIAN*, 12/1, 13-31, 2009

Antonio Fc. Canales Serrano

“Las lógicas de la victoria. Modelos de funcionamiento político local y provincial bajo el primer franquismo”, *II Encuentro de investigadores del franquismo (alicante, 11, 12 y 13 de mayo 1995)*, *Instituto de cultura Juan Gil Albert, vol 1*, 1995

Benito Sanz Díaz

“El fin del franquismo en la Universidad. El primer congreso del Sindicato Democrático de Estudiantes Universitarios de España (1a RCP). Valencia, 30 de enero/2 de febrero de 1967”, *II Encuentro de investigadores del franquismo (alicante, 11, 12 y 13 de mayo 1995)*, *Instituto de cultura Juan Gil Albert, vol 2*, 1995

Cesar Hornero Méndez

“El incidente Carande: otro suceso universitario en 1956”, *CIAN*, 9, 11-56, 2006

David E. Apter and Nagayo Sawa

Against the state-politics and social protest in japan-, 1984

Francisco Morente Valero

“La Universidad fascista y la Universidad franquista en perspectiva comparada”, *CIAN*, 8, 179-214, 2005

Ignacio Fernández de Mata

“La memoria y la escucha, la ruptura del mundo y el conflicto de memorias”, *Hispania Nova*, 006: 689-710, 2006

Juan José Carreras Ares y Miguel Ángel Ruiz Carnicer

“La Universidad española bajo el régimen de Franco (1939-1975)”, 1991

Javier Muñoz Soro y Shophie Baby

“El discurso de la violencia en la izquierda durante el último franquismo y la Transición (1968-1982)”, *Culturas y políticas de la violencia en España siglo XX*, Javier Muñoz Soro, Jose Luis Ledesma, Javier Rodrigo (coord), 2005

José Álvarez Cobelas

“La FUDE 1961-65”, *II Encuentro de investigadores del*

franquismo (alicante, 11, 12 y 13 de mayo 1995), *Instituto de cultura Juan Gil Albert, vol 2*, 1995

Miguel Ángel Ruiz Carnicer

“El Sindicato Español Universitario (seu) del distrito de Zaragoza durante la guerra civil (1936-1939)”, *Revista de historia Jerónimo Zurita*, numero 53-54, 1986

“Metodología de la investigación sobre fuentes aragonesas”, *Actas de las VI jornadas Graus*, 1990

“El aparato falangista ante la caída de los fascismos. FET-JONS en 1945”, *Spagna Contemporanea*, numero 4, 1993

“Violencia, represión y adaptación. FET-JONS, 1943-54”, *II Encuentro de investigadores del franquismo (alicante, 11, 12 y 13 de mayo 1995)*, *Instituto de cultura Juan Gil Albert, vol 1*, 1995

“La voz de la juventud. Prensa universitaria del SEU en el franquismo”, *Bulletin Hispanique*, tome 98, 1996

“Violencia, represión y adaptación. FET-JONS, (1943-1945)”, *Historia contemporanea*, numero 16, Universidad del país vasco, 1997

“Los estudiantes de la Universidad de Valencia en el franquismo (1939-65). Del encuadramiento político a la agitación social”, *Universidad de Valencia Saitabi Revista de la Facultat de Geografia i Historia*, numero 49, 1999

“Estudiantes, cultura y violencia política en las universidades españolas 1925-1975”, *Culturas y políticas de la violencia en España siglo XX*, Javier Muñoz Soro, José Luis Ledesma, Javier Rodrigo (coord), 2005

Pascual Tamburri

“El imaginario medieval en la Universidad franquista”, *CIAN*, 4, 267-298, 2001

Raúl Aguilar Cestero

“El despliegue de la Universidad Autónoma de Barcelona entre 1968 y 1973: de fundación franquista a motor del cambio democrático en Cataluña”, *CIAN*, 10, 13-199, 2007

Sergio I. Rodríguez Tejada

“La caída de la organización universitaria del PCE en Valencia en manos de la policía franquista (1971). Un ejemplo de la represión contra el movimiento estudiantil”, *II Encuentro de investigadores del franquismo (alicante, 11, 12 y 13 de mayo 1995)*, *Instituto de cultura Juan Gil Albert, vol 2*, 1995

イメージに関して

「東京大学の百年」編集委員会

『東京大学の百年』1977

茜三郎, 柴田弘美

『全共闘』2003

日本大学広報部

『日本大学の九十年』1979

法政大学百年史編纂委員会

『法政大学百年史』1980

毎日新聞社

『大学シリーズ——立教大学』, 『大学シリーズ——日本大学』, 『大学シリーズ——慶應義塾大学』, 『大学シリーズ——法政大学』, 『大学シリーズ——明治大学』, 『大学シリーズ——中央大学』1971

渡辺ひろみ

『東大全共闘 1968-1969』2007

編集者

『写真図説日本学生の歴史』1970

三留理男

『三里塚——成田闘争の記憶——』2008

砂川を記録する会制作, 星紀市監督

『砂川の熱い日 [映像資料]』2002

Peter Burke

Visto y no visto. El uso de la imagen como documento histórico, 2001